

東方  
ハン  
グ  
オー  
バー

暖かな春の夜空を星達が埋め尽くし、白く冴えた月光が暗闇に染まった地上をうつすらと照らしていた。

少し前までは急激な気温の変化により、桜が散った時期になっても真冬のような寒さに襲われる事もあった。人里ではまた異変の前兆ではないかと噂が立ってしまったが、例年通りの春うららかな陽気が続き始め、そんな噂は皆すぐに忘れ去ってしまった。

少し遅めに咲き乱れた桜はとつくに散ってしまったが、絶好の宴会日和と呼べる最高の気候であった。

そしてここ、幻想郷の一番東に存在している博麗神社でも、普段通りに宴会が行われていた。「いやー、去年は月に行ったり都市伝説が起こったりして大変だったなー。まあ、今年はまだ何も起きてないが」

縁側に座って他人事のようにゲラゲラと笑いながら、金髪の魔法使い霧雨魔理沙きりさめまりさが残り僅かな酒を呷っていた。

「何言ってるのよ。ただでさえ都市伝説の件だってまだちゃんと解決していないし、これ以上問題が起きたら私の身がもたないわよ」

暢気な事を言う魔理沙の隣で溜め息をつく少女が居た。紅白の巫女装束に身を包んだ少女、この博麗神社の主であり、楽園の素敵な巫女、博麗霊夢はくれいれいむであった。

昨年は幻想郷の存在を揺るがすような大きな異変に見舞われ、一時的に外の世界へ出て

行ったり、月まで行って異変解決しに行ったりと、てんてこ舞いであった。

おまけに都市伝説異変と呼ばれている異変はまだ解決の糸口が見えていない。しかし、霊夢は夏ぐらいには解決するのではないかと読んでいた。

ただし根拠はない、いつものよく当たる勘である。

「毎日お茶飲みながら煎餅食って寝てるだけのクセによく言うぜ」

「い、いざという時の為に体力を温存してるの！ あちこち飛び回っても無駄に消費するだけだし」

霊夢はプイッとそっぽを向くと、魔理沙はくっくくつくと笑みを浮かべた。

そんなやり取りをしている二人の向かい側で、一人の少女がそのやり取りを眺めている少女がいた。

「……………」

そこには少し大きめの莫塵モジンが敷かれ、長い緑色の髪を伸ばした巫女服のようなものを纏っている少女……東風谷早苗こちやめさなえが座っていた。

（なんだろう、ものすっごく既視感デジヤクを感じる……）

酔い潰れないようにちびちびと酒を呑みながら、さつきから早苗はそんな事を思っていた。それもそのはずである。以前ここで酔い潰れた結果、過去の幻想郷に飛ばされてえらい目にあつた経験があるのだ。（風祝シリーズ参照）

その時もこんな感じのシチュエーションが繰り返られていたような気がしたのだ。何も

起きなければいいのだが……。

早苗がそんな不安に駆られている隣で、二人の騒がしい声が神社に鳴り響く。

「よし、猪鹿蝶だ！」

「ぬわーっ！ また負けたのだー！」

そこに居たのは死神の船頭、小野塚小町と千四百年ぶりにこの世に復活した道士、物部布都の二人であった。

二人は呑みながら花札で勝負をしていた。しかし、さつきから小町の勝ちで終わっているようで、布都はついに手札をばら撒きながら仰向けに倒れてしまっていた。

「弾幕ごっこもいいが、何も勝負事なんてもんはそれだけじゃない。でも、遊びであたいに勝とうなんて三千年ぐらい早いね」

さすが幻想郷を誇るサボマイスターが言う事は凄みがある。その情熱をもう少し仕事の方に向ければいいんじゃないだろうか、この場に居る誰もがそう思っただろう。

「太子様……申し訳ありません……死神には敵いませんでした……がくっ」

自分の口から「がくっ」と言ってる時点で全然余裕なのだろう。

最初はいつもの三人（霊夢・魔理沙・早苗）で呑んでいたのだが、仕事帰りの小町が訪れ、豊聡耳神子の命令で偵察に来ていた布都が現れた。後者の布都は完全に仕事を放り投げるようにしか見えなかった。というか、自ら「偵察にきたぞ」と言っている時点で色々と駄目な感じである。

「まあ、あたいたばかり勝つててもしょうがないし、交代するかい？」  
小町の申し出に早苗はこくりと頷く。既に早苗も小町と数回勝負しているが、一向に勝てる気配はなかった。

その会話を聞いていた布都は目をカツと見開いて起き上がった。

「はっはっはー！ 彼奴には遅れを取ってしまったが、お主には負けぬぞ！」  
ゾンビも真っ青になる程の復活の早さだった。

「あら、お忘れでしたか？ 私だつて一応、神様グなんですけど」

「……た、たとえ相手が神様だとしても、これ以上恥の上塗りは出来ない！ いざっ！」

早苗と布都の花札勝負が始まった。どちらも今日は互いに白星無し「どっちが勝つのか楽しみだ」と見学しようとした小町だったのだが、肝心の酒が品切れになってしまった。

「おや、こっちはもう全滅かー」

小町はどっこいしょと立ち上がつて霊夢と魔理沙の方へ向かう。酒が無くなったと霊夢達に伝え、新しい酒を調達しようとする。

「えー？ もう全部空けちゃったの？ 今日はあるが来るなんて思ってなかったし、あんま出してないのよねえ」

「せっかく面白くなつたきたところなんだよ。今度夜雀の屋台でご馳走してあげるから、もう一本だけ頼むよー」

小町は菩薩ぼさつに拝むように両手を合わせた。

しかし、靈夢は非常に面倒臭そうな顔をしていた。台所に仕舞ってある分は全て空けてしまい、新品の酒は少し離れた倉まで取りに行かなければならなかった。

「私もちよつと飲み足りないし、面倒なら私が取ってくるぜ？」

そう提案したのは魔理沙だった。しかし、靈夢はより嫌そうな顔をしてそれを拒んだ。

「魔理沙は絶対ダメ」

靈夢は両腕をクロスさせて大きな×印を作る。

「えー、何でだよー」

「あんたがあそこに入ったら、酒以外の物も勝手に持っていくでしょうが！」

「そ、そんな事無いよな？　なあ、小町」

小町に同意を求めるが、小町は苦笑いを浮かべた。

「さあねえ……？　少なくとも、いつぞや道端に置いてあったお地藏様を勝手に持ち出した奴は信用ならないけどねえ」

「そ、そんな事もあったつけ……？　もう昔の事だから忘れちゃったぜ」

「その少し後にパチユリーが来たわよね。魔理沙に本を盗られたって取り返しに来たじゃない」

二人に対して何もしていない筈なのに、何故か責められる魔理沙は頭を抱えた。

「分かった。分かったからこの話はやめよう！　いいか二人とも、お酒っていうのはもっと楽しく呑まなきゃいけないんだ。そうじゃなければお酒に失礼だからな！　だから靈夢、私

からも頼む。お酒持ってきてくれ」

魔理沙も小町と同様に霊夢に拜んだ。神様仏様霊夢様、という感じであった。

「はあ……、まったくしょうがないわね」

酒を持ってこない限り、この二人はいつまでも拝むのをやめないだろうと思った霊夢は仕方なく立ち上がる。戸棚から鍵を取り出して倉の方へ向かった。

魔理沙と小町はハイタッチをすると、霊夢を待っている間に早苗達の様子を見に行った。

そこには照れ臭そうに笑っている早苗と、格下相手の自爆に巻き込まれたどこかの戦士のように、無様に倒れこんでいる布都の姿があった。

「一ラウンドも取られませんでした！」

ドヤ顔でピースをする早苗であったが、全敗を喫した布都はもはや再起不能になっていた。

「こりゃご愁傷様としか言いようがないねえ」

「無茶しやがって……：しょうがない、ここは私がお前の仇を取ってやる」

「ふふっ、いいんですか？ 今の私はノリに乗っていますよ？ ロイヤルストレートフラッシュユグらい余裕で出せますよ！」

「いや、それ花札違うし……」

まるでポロクズのようになった布都の体を押し退けて、魔理沙が早苗と向かい合う。

「伊達にスペルカードに恋符なんて付けてるわけじゃないぜ？ その昔、こいこいのまりちゃんと呼ばれた私の真の恐ろしさ、味わせてやるぜ！」

魔理沙が不敵な笑みを浮かべると、早苗はごくりとつばを飲み込んだ。決闘ですら中々見せない自信に満ち溢れた魔理沙に、僅かながら恐れを抱いてしまった。

(大体こういう事を言う奴が負けるんだよね……)

小町がそんな事を思いながら山札を切って場と二人に配った。

余裕を見せていた魔理沙であったが、勝負は平行線を辿っていた。点数を取りつつ取られつつ、白熱した戦いが続いていた。

あつという間に最後の十二回戦を迎え、早苗が十点の差を付けてリードしていた。

(きた……！ 三光だ！)

早苗よりも先に役が完成する魔理沙であった。点差が広がっていないなければここで「勝負」を宣言して勝利が確定したのだが、ここで上がっても総合得点が足りない。もう一枚役になる札を手に入れなければ、この回は勝っても総合の得点で負けが決まってしまう。

「もちろん私はッこいこいッを宣言するぜ！」

通常ならばそれなりのリスクを背負うのだが、試合はオーラスを迎えている。背負うものなんて何もない。ノーガードで突き進むしかなかった。

「まあそうするしかありませんよね……ですが、私の運命力の前にひれ伏すがいい！」

揺るぎない自信に満ちた早苗は場に紅葉の札を叩き付け、山札に手を掛けようとした時であつた。

「ふえっ……ぶえつくしよい!!」



## プロローグ

魔理沙の隣でまだ倒れていた布都が大きなくしゃみをする。それだけならば良かったのだが、その腕がくしゃみの勢いで大きく弧を描き、なんと早苗が取ろうとしていた山札を薙ぎ倒してしまった。

「あああああ——!!」

魔理沙が頭を抱えて絶叫する。ここ一番というところでもとんでもない人災が起こってしまった。

見事に山札はごちゃごちゃになり、何が一番上に乗っていたのか分からなかった。

早苗と小町は同時に「あーあ」と口を開ける。

「布都……お前って奴は……!」

怒りを通り越して呆れる事しか出来なかった魔理沙は、がつくりとうな垂れてしまった。

「あつはつは、まあそう肩を落とすなって、早苗が取ろうとした札は——こいつさ」

小町の手には一枚の札が握られていた。

「あたいの能力をお忘れかい？」

その能力は『距離を操る程度の能力』である。目的地や相手との距離を自由に操る事が出来るため、相手と自分の位置を入れ替えたり、瞬間移動をしているように見えたりする力を持っている。

小町は布都の腕が山札を崩す前にその能力を使用し、山札を取れる位置まで近付いて咄嗟に取り出す事に成功したのだ。

「そんな事するぐらいなら、こいつの体を離れた所に移動すればよかつたんじゃないか？」  
「ごもつともな意見だけど、人を退かすのと自分が動くには必要なエネルギーと掛かる時間が違うんだ。布都を動かそうとしたらとても間に合わなかつたねえ……さて、そんな事より早苗が引こうとした札、それは——」

早苗と魔理沙から見えて裏面の黒い札がゆっくりと反転する。

「——こいつさ！」

その絵柄が露になる時であつた。小町の背後から黒い人影が突如現れる。

「ちよつと、さつきから何をギャーギャー騒いでるのよ」

「おっと！」

小町の背後から突然声が聞こえ、驚いて手から札が離れてしまった。それは回転しながら散らばつた花札の中に落ちてしまい、混ざつてどれが落ちてきたのか分からなくなつてしまつた。

「な、なにやつてんだ！ 霊夢も突然声を掛けるなつて！」

「うつさい。せつかく人が追加のお酒取つてきてあげたんだから」

霊夢の両腕には一升瓶が二本ぶら下がつていた。

「まあまあ……ところで小町さん、結局あの札は何だつたんですか？」

一人白熱している魔理沙とは違い、早苗は比較的冷静であつた。

「え？ ああ、それは——」

「青い短冊だったわよ。紅葉のね」

小町の代わりに霊夢がそう言い放つと早苗は晴れやかな笑顔になるが、一方の魔理沙はどこのボクサーのように真っ白く燃え尽きていた。

早苗の取得した札の中には青い短冊が既に二枚揃っていた。早苗が引いた青い短冊で合計三枚で役となり、結果的には早苗の勝ちで終わっていたようだ。

「そんな事よりほら、死んでる暇があったら呑みなさいよ」

「……へいへい」

魔理沙と小町に一升瓶を渡し、霊夢は自分と魔理沙の分の杯を取りに行った。

「これはまた……見た事がないお酒だねえ」

その酒には「ふっか華宵」というラベルが貼られていた。そのおかげで一目で外の世界の酒だという事が分かった。

「なあ霊夢、これってあれか？ お供えで置いてあったやつ？」

「そうよ。とりあえず適当に持ってきたけど……ほら」

霊夢が魔理沙に杯を渡すと、先に小町が蓋を開ける。瓶からは芳醇な華やかな香りが瓶の中から漂ってくる。

「こりゃ結構な上物っぽいじゃないか」

小町は未だに倒れている布都以外に酒を注ぎ、再び乾杯をする。

全員が一口だけ口に含むと、皆揃って驚いた表情を見せた。

「凄い、なんて飲みやすいんでしょうか……」

早苗はその軽さに驚いた。アルコールが入っているとは思えない程口当たりがいい。

「こいつならいくらでも飲めそうだな」

魔理沙もこれが酒であるという事を忘れていたかのように、一気に飲み干してしまった。

「へえ……こんな物もあるんだねえ」

小町は口の中に広がる甘さとコクに感心していた。甘過ぎずる訳でもなければしつこい訳でもなかった。

（しまった。これって当たりの部類じゃない……お祝いの時の為にとっておけばよかった）

霊夢だけは普段通りの事を思っていた。さすがの博麗の巫女はブレる事を知らない。

それぞれの感想が出た後、それまで倒れていた布都の体がぴくりと動いた。

「……どれ、我もそのお酒を貰おう」

何事もなかったかのように起き上がった布都は、しれっとした顔で酒を要求した。

「現金な奴……」

魔理沙がそうほやきながら布都に酒を注ぐと、グイッと酒を呷った。

「あ、こら！ もう少し味わって飲めってば！」

魔理沙がそう文句を言うが、目をキラキラと輝かせている布都の耳には届いていなかった。

「う、美味しい！ なんだこのお酒は!? こんな美味しいお酒は生まれて初めてだぞ！」

「ちよっと、一人で全部飲まないでよね。このお酒、ここにある二本しかないんだから」

「わ、分かっておる……で、でも」

——止まるわけがなかった。それは布都だけはなく霊夢達も同じであり、あつという間に二本の一升瓶が空になってしまった。

「ういっく！ ねえ、霊夢しゃん……本当はまだ残ってるんれそ？」

猫撫で声を出しながら、へべれけになった早苗は霊夢に抱き付いた。

「らめ！ らいものはらいの！」

短時間で大量のアルコール摂取をってしまったせいで、霊夢や他のメンツもかなり出来上がっていた。

「またまたー、わらしと霊夢の中らろ？ ちょっとぐらいサービスしろよ」

魔理沙も霊夢に抱きつくと、連鎖的に小町と布都まで引っ付いてきた。もはやハーレム状態である。

「ええい、あんたらうつつとうしいわあ！」

霊夢は引き剥がそうとするが、他の四人は霊夢が折れるまで諦めなかった。

やがて諦めた霊夢が「分かったわよ」と言いながら四人を引き摺りながら倉へと向かって行く。

「あはははは！ 霊夢しゃんらい好きー！」

しかし、これが後に起こる事件の発端となってしまうとは、この時の五人は夢にも思わなかっただろう。

その後、倉の中へと消えていった巫女達の姿を見た者は……誰も居なかった。